

---

# ヴァンパイアkiss

隠李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴァンパイアkiss

### 【Nコード】

N8091E

### 【作者名】

隠李

### 【あらすじ】

「……………ヴァンパイア何てまったく信じていなかった姫羅の前で、ずっと友達だと思っていたナイトがヴァンパイアだと宣言!?しかも、自分の前で次々に同士討ちをするナイト。姫羅は、ナイトがヴァンパイアだ何て考えたくないのに……残酷な事に逃れられない真実。さあ、姫羅とナイトの行方は!?」

「……………」

## 第1話ヴァンパイア

貴方はヴァンパイアといえは何を想像できますか？

・人間の血を吸う化け物

・血に飢えたモノ

・鋭い牙

など血に関することを想像しますか？この街には、昔ヴァンパイアが住んでいたと言つ言い伝えがある。

昔はその言い伝えを多いに信じられていましたが、時が流れる度、誰もヴァンパイアを信じなくなってしまい

ただの迷信となつてしまいました。

何故なら、昔は多々ヴァンパイアを見ていましたが

今ではヴァンパイアを目にする事が出来なくなつたからです。

それもその筈

今のヴァンパイアは

・・・人の形をし・・・

- 街に住み着いているカラ -

誰もがヴァンパイアをみる事が出来なくなったのである。

そして、私もヴァンパイア何て信じていなかった。

「ナイト！」

私がナイトを呼ぶと、ナイトは少し驚いた様子で

「何？」と、無愛想に言った。

私とナイトは、家が隣同士で、引っ越して来た時は、

私が話し掛けても、一言も喋る事もなく、無視されていた。

が、今では、とても仲良くなった。

イロイロ相談にも乗ってくれるが、ナイトは私に何も相談してくれない。

ナイトは、私の事全然信頼してない気がして、時々悲しくなる。

私はナイトが誰も頼らず一人で全てを抱え込んでいる様に見えてしまう。私をもっと信頼してイロイロ話してって言いたいけど言ったらナイトに嫌われそうな気がして怖い。

自分の臆病さが憎らしい。嫌になる。

「・・・羅？姫羅・・・姫ー羅！」

「な、何！？」

「いや・・・ポーっとしてたカラ」

ナイトが心配して話し掛けてくれた。

「ごめんね！ちよっとポーとしてたダメ・・・」

「そうか・・・」

ナイトは少し気掛かりに言った。

「何かあつたら言えよ」

「ありがとう）∨^。-（授業始まる！行こう）^O^（」

「ん・・・ああ」

## 第2話「凶悪なヴァンパイア」

キーンコーンカーンコーン

「「セーフ」」

私とナイトはハモって言った。

そして授業中

ポンッ

何かが、姫羅の頭に当たった。

「ん？」

中は手紙になっているようだ。

姫羅って好きな人いる？教えて（ ）

姫羅は 嫌だ〜 と書いて投げた。

あゝ、もしかやナイト君？仲良いからね〜

何だか、自分の中の何かが変な感じになった。  
ちくちくする様なもやもやする様な不思議な感じ。

それが何か分からない感情の事を考えているといつの間にか授業が  
終わっていた

「ありやりや ノート取ってないわ〜」

と、つい言ってしまった。

するとナイトが

「馬鹿だ！？馬鹿がいる！」

「むあー！ー！ー！！馬鹿にしたな！この馬鹿タヌキ！！」

「は？じゃあお前はボケタヌキだ！ー！！！」

と、二人で壮大な喧嘩をした。

するとイキナリ学校中の窓ガラスが割れ

鋭い牙と何かに飢えた様な人間の姿をした化け物が来た。

そうこれがヴァンパイア凶悪なヴァンパイア

「ひゃ！な、何！？」

姫羅は、あまりの怖さに足がくすみなながらも、武器になりそうな物  
を手にとった

（ゆ、夢なら覚めろー！！お願いだー！！マジ怖えーあ・・・！そう  
だこれは超リアルなぬいぐるみだ！いや〜スゲーリアルだな〜 ビ  
ツクリだ〜アハハハハ〜）

とか、考えている間にイキナリヴァンパイアは姫羅に突進してきた。

「ってんなわきゃないか」(う!?!塚、避けられない!!)

### 第3話「ヴァンパイアを裁くヴァンパイア」

ダンッ！！

「ひゃ！？じ、銃声??」

「動くな！動いたらソッコで撃・つ・ぞ（黒笑）」

この声は

「ナイト!!」（塚、怖ッ!?!）

「大丈夫!? 姫羅」

「か、楓ちゃん」

「はい、もう面倒・撃つ」

ダンッダンッ!!!!!!

びちゃ!グチャ!

そして、ヴァンパイアは消滅した。

「何だったの!? 今の!?!」  
皆がナイトに駆け寄る。

だがナイトは

「知らん！」

言う言葉はそればかり。

皆に何も教えないつもりなのだろう。「大丈夫だった？」

楓が言う。

「うん・・・ちょっとナイトに助けてもらったお礼言ってくるね」

「うん 行ってら〜」

「ナイト・・・ちょっと良い??」

「ん?ああ」

そして私はナイトを人気がないところに連れてきた。

「あ、あの今日、た・・・助けてくれて・・・あう・・・ありがとう・・・」

そう私は、謝るのが大の苦手である。

しかも、言う言葉は可愛く

「ありがとう(∩^\_^.)」のつもりが、あの変な謝り方になってしまった。

「ん・・・ああ。お前も判っていると思うがあれはヴァンパイアだぞ」

「や、やっぱり・・・」

「因みに俺とお前を狙って来ると思う」

「へ〜そ〜なんだ〜」

「は!?!?!?ナイトと私!?!?ど、どーゆー事なの!?!?」

「何で私とナイトなの!?!」

「俺は、ヴァンパイアだから・・・だが、俺は罪を侵したヴァンパイアを裁くヴァンパイアだ。そして、お前は・・・知らん!?!」

「知らん〜!?!?何だ?意味わかんない?!!」

「理由なく襲うんじゃない?」

「適当過ぎるよ〜」

（本当はお前の血がほかの人間の血より特殊だから）



「ん」

ナイトは、初めて会った時に比べて、ホントによく、話す様になってくれた。私は、それが何より嬉しい。( ^ - ^ ) 。

「はぐにしても、世の中コイツみないな馬鹿を好きになる程の物好きも存在するんだな」 ( ; )

「そうだねっつて!!おい」

姫羅とナイトはいつもの様に喧嘩をしながら教室へ向かった。

塚、今まで考えもしなかったケドナイトは、相当モテてるよな。頭もそこそ良いし、スポーツ万能だし、オマケに超力ツコイイしなんか殺気が湧くわ ( . . . ; )

ポンッ!!

誰かが肩を叩く

「くびゃー!!!!!!」

イキナリ来たから驚いたとはいえ凄い声を出した姫羅

「そんな、驚くこと無いでしょ!!」

「か、楓ちゃん・・・( ; ) ( ; ) び、ビックリした」

どうやら、話し掛けたのは楓のようだ。

「こっちが驚いたわよ!」

「じゅめん・じゅめん(。人。)」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8091e/>

---

ヴァンパイアkiss

2011年1月27日15時14分発行